

思いを託す

三宅島では、カワヅザクラ（河津桜）が咲いています。まだ冷たい風の中で、つぼみがゆっくりと色付きゆく様子を見ると、春はある日突然訪れるのではなく、小さな変化に気付きながら近付いてくるのだと感じます。

カワヅザクラは、1955年ごろ静岡県河津町で、地元の方が偶然拾った名もない苗木から始まった桜だそうです。その一本を庭に植え、時間をかけて見守る中で、早く咲き、色が濃く、長く咲く特別な花であることがわかりました。何気ない出会いに気付き、それを育て続けた人のまなざしが、新しい風景を生んだのです。



さて、先日2月13日（金）に、本校は東京都情報活用能力育成研究指定校としての二年間の研究のまとめとなる研究発表会を開催しました。当日は、村議員の皆様並びに地域、保護者、そして多くの学校関係者の皆様にご来校いただきました。子供たちの学びを多くの大人が見守る時間は、島の学校が地域と共にあることを改めて感じさせる一日でした。今回の研究の中心にあったのは、「ICTを使うこと」そのものではありません。子供たちがどのように考え、気付き、学びを深めていくのか。その過程を丁寧に見つめることでした。

講師としてお招きした東京学芸大学森本康彦教授は、次のように語られました。

「学ぶとは、気付くことである」

子供たちは、考え、迷い、友達の言葉に耳を傾ける中で、「なるほど」と心が動く瞬間に出会います。たくさん間違いを繰り返し、小さな気付きの積み重ねが、確かな理解となり、自信となり、未来を支える力へと変わっていきます。教室では、子供たちが仲間と対話しながら課題に向き合っています。一人で考える時間、協力して話し合う時間、発表する時間。そのすべてが、気付きを共有し、学びを深めていく時間です。

森本教授はまた、子供の学びは教室の中だけで完結するものではないとも教えてくださいました。子供は、学校・家庭・地域を往還しながら育つ存在です。学校での気付きが家庭での会話につながり、地域での経験が新しい問いを生む。人と人との関わりの中で、子供たちは静かに成長を重ねていきます。

カワヅザクラは、一輪が開くと、次の花を呼ぶように咲き広がります。子供たちの気付きもまた、人のつながりの中で広がり、次の学びへとつながっていきます。

この春、三宅島の教育を長く支えてこられた先生が、静かにこの世を旅立たれました。島の宝である子供たちのために教育の在り方を問い続け、果敢に改革を進めてこられた元三宅中学校の校長先生でした。赴任したばかりの私へもご挨拶に来てくださり、学校行事の際にはいつも顔を見せてくださるなど、温かな眼差しで見守ってくださいました。教育とは制度でも仕組みでもなく、人である。そのことに私たちが気付くきっかけを与えてくださったように思います。その思いは今も私たちの中で生き続け、次の世代へと受け継がれています。

カワヅザクラの花言葉の一つに「思いを託す」とあるそうです。人から人へと受け継がれる思いは、目には見えなくても確かに生き続けます。人として、そして教育に携わる者として、託されたその思いを未来へ手渡していくことが、私たちの務めなのだと感じています。

校長室の窓から見える日常では、子供たちが今日も考え、試し、言葉にしながら学んでいます。一つ一つの営みは決して大きな出来事ではありません。しかし、その静かな気付きの積み重ねが、人を育て、学校を支え、やがて地域の未来へとつながっていきます。



「学びは、気付きであり、そして人の築きである」

そんなことを想い、新しい春に子供たちと共にまた次の一步を踏み出します。